

児童・生徒の学力向上を図るための調査結果

実施日 平成 21 年 1 月

【参考】東京都教育委員会「児童・生徒の学力向上を図るための調査」

* 問題については、東京都教育委員会のホームページをご覧ください。

問題解決能力等に関する調査の結果 (括弧内は昨年度の結果)

評価の観点	東京都	板橋区	本校
問題を発見する力	81.5% (77.2%)	82.2% (77.9%)	83.8% (78.1%)
見通す力	59.6% (54.9%)	60.3% (52.4%)	63.2% (58.9%)
適応・応用する力	54.5% (52.7%)	53.5% (52.4%)	54.4% (55.1%)
意思決定する力	50.6% (58.3%)	50.2% (57.9%)	50.0% (50.7%)
表現する力	72.1% (77.2%)	72.2% (75.3%)	80.9% (93.2%)
問題解決能力等平均	60.2% (59.8%)	59.9% (59.2%)	61.9% (62.7%)

1 調査の分析

この調査は、東京都教育委員会が、各教科の学習で身に付けた知識や技能、思考力や判断力等を活用して、問題解決を図るために必要な諸能力をペーパーテストで調査したものである。(確かな学力の伸長を測るための調査)

調査結果から、本校は、都平均、区平均と比較して、見通す力及び表現する力の正答率が高く、特に表現する力の正答率がとても高いことが分かる。これは、本校の研究教科である算数科の少人数指導において、児童一人ひとりの発言や発表に力を入れてきたこと、また、表現活動を重視した外国語活動に長年取り組んできたことの成果と言える。

昨年度の結果では、意思決定する力の正答率が低く、児童がこのような問題に慣れていないものと考えた。本校では意思決定の力を「目標達成のために最適な方法を選択する力」ととらえており、問題解決型の学習を充実させてきた。

また、本校の課題の根底には読解力不足があるとして、読書量の増加を図り、諸課題の改善のための方策の一つとして、放課後の学校図書館開放を試行実施した。今回の結果で「意思決定する力」について、東京都の平均と比較してマイナス0.6ポイントではあるが、前回のマイナス7.6ポイントを改善できたものとする。しかし「適応・応用する力」については、東京都の平均値をマイナス0.1ポイントではあるが下回っている。このことは、例えば理科の学習において、単に理科の学習場面だけでなく科学的な思考を生活場面で育てるなど、適応力・応用力を高めるための具体的な指導の工夫が必要であるとする。そのためには、基礎・基本事項の習得と定着がまず必要であり、実験・観察による自然事象のみならず、身近な生活の中での様々な現象との関連性についても、自分の言葉で書いたりまとめたりする力を付けることが大切である。

本校では、こうした児童の学力調査の結果分析から改善に向けた方策を探り、指導改

善のプランを作成することで、日々の授業改善に取り組んでいる。

また、調査結果から、児童に望ましい学習習慣を身に付けさせることが大変重要であることも明らかになっている。学習習慣については、学校の教育だけで十分に身に付くものでなく、家庭や地域が与える影響も大きい。したがって、家庭や地域との連携・協力を図りながら、児童が主体的に学習しようとする意欲を高めるとともに、しっかりと学習習慣を身に付けさせ、確かな学力の向上を図って行くことが必要である。例えば、「国語の漢字・算数のかけ算九九」などは、十分な定着を図るためには、学校での学習だけでなく、家庭や地域での学習が必要となる。また、家庭・地域と連携していくことによって、児童の学習機会が増えるだけでなく、習得した資質や能力を活用する場面も増えていく。家庭や地域の皆様には、本校の学力向上の取り組みをご理解いただき、ご協力いただくなかで、確かな学力の向上を図りたい。

2 改善に向けての方策

(1) 各教科等の指導の充実

【国語】

国語科においては、「言語活動の指導の充実」を図ることが大切である。言語は、論理や思考、コミュニケーション、感性・情緒の基盤となるものである。また、国語科で培った能力をベースに、各教科の授業において、体験したことを表現したり、観察や実験した結果を記述・報告・説明するなど、言語活動を設定していくことも必要である。国語科の指導改善のポイントとしては、

- ① 文章の読解等については、一人ひとりに読み取りのめあてをもたせる。
- ② 様々な分野の本にふれさせるとともに、読書意欲を高める工夫をする。
- ③ 授業に限らず、一人ひとりが自由に考えたことを発表し合い、考えを深めることができる場の設定をする。

【社会】

今回の調査において「社会科の授業の内容がよく分かる」と答えた児童のなかで、「実際に体験することができる授業だったから」を挙げている児童が多い。こうした社会科の特性に応じた学習方法を行うことにより、「授業がわかる」と実感していることが考えられる。こうしたことを踏まえると社会科の指導改善のポイントは、

- ① 身近な事象について、実際に自分で調べたり、考えたりする学習を工夫する。
- ② 体験や見学について記述する際には、写真やグラフ等を活用させる。
- ③ 学んだことを、家庭や地域での生活に生かそうとする態度を育む。

【算数】

調査から本校における学力の定着状況は、おおむね良好ではあるが、算数の学習状況をみると、系統的・段階的に学習を積み重ねていくために必要となる基礎的な知識・技能や考え方が十分に身に付いていない。このことから、児童の学習のつまずきに丁寧に対応することが必要であり、スモールステップで分かりやすい指導とともにつまずきの要因を明らかにして、個に応じた段階的な指導を行っていくことが大切である。指導改善のポイントとしては、

- ① ティームティーチングや少人数指導等では、児童のつまずきを把握し、丁寧に対応する。
- ② 単元の特性に応じ、いろいろな解き方にふれさせ、考えを深めさせる。
- ③ 学習したことから何が分かったのかなど、学習を振り返って考える場を設定する。

【理科】

社会科と同様に、理科においても授業内容をよく分かるようにするには、「観察や実験を重視した授業」が必要である。児童が自分なりの仮説（予想・理由）を立ててから、観察や実験を行い、その結果を表やグラフ、レポート等にまとめたりするなど理科の学習特性に応じた指導を行うことが大切である。こうしたことを踏まえると指導改善のポイントは、

- ① 導入では、身近な事象の提示を行い、興味・関心を高める工夫をする。
- ② 実験・観察等では自分で結果を予想し、確かめる場を設定する。
- ③ これらの体験的な活動や問題解決的な学習について、教材・教具や事典・図鑑等の充実を図り、日常的に追求できるような環境作りを進める。

【生活】

生活科の特質は、直接体験を重視した学習活動を行うこと、身のまわりの地域や自分の生活に関する学習を行うことである。そうした学習において、自分の生活や自分自身について考えさせたり、生活上必要な習慣や技能を身につけさせたり、自立への基礎を養っていくことが趣旨であり、こうした点を踏まえると指導改善のポイントは、

- ① 日常的な体験活動を通して、事実や自然をありのままに見つめる眼を育てる。
- ② 記録カードには、めあてや感想を記し、視点を明確にして相違点に気づく力を培う。

【音楽】

小学校の音楽科においては、音楽のよさを感じ取り、思いや意図をもって表現したり音楽全体を味わって鑑賞する力の育成や、音楽文化を理解し、豊かな情操を養うことを重視することが大切であり、こうした点を踏まえると指導改善のポイントは、

- ① 聴いたり、表現したりする活動を通して、感じ取る力や気づく力を育て、それらを伝える方法を身につけさせる。
- ② 教科の特性を生かし、歌ったり、演奏したりしながら人とかかわる場を工夫する。

【図画工作】

図画工作科においては、表現や鑑賞の活動を通して、自らつくり出す喜びを味わうようにするとともに、感性や想像力、手や体全体の感覚などを働かせながら創造活動の基礎的な能力を高め、生活や社会と主体的にかかわる態度を育て、豊かな情操を養うことを重視しており、次の点が指導改善のポイントとなる。

- ① 豊かな発想をさらに膨らませ、一人ひとりの表現を大切にしながら支援する。
- ② 発達段階に合わせて、必要な技能を身につけさせるとともに、完成したときの達成感や成就感を味わえるような単元の工夫をする。

【家庭】

家庭科においては、生活を工夫する楽しさやものをつくる喜び、家族の一員としての自覚をもった生活を実感するなど、実践的・体験的な学習活動、問題解決的な学習を通して、自分の成長を理解し、家庭生活を大切にしている心情を育むとともに、生活を支える基礎的・基本的な能力と実践的な態度を育成することを重視しており、次の点が指導改善のポイントとなる。

- ① 実際に活用できる教材を工夫し、日常生活に基づいた体験的課題の設定をする。
- ② 家庭との連携を図り、必要に応じて長期休業等に継続的な実践ができるよう

にする。

【外国語活動】

外国語活動は、新学習指導要領に位置づけられ本年度は移行期間として 5・6 年生で実施されている。本校では数年前から英語活動として全学年で週一回の指導を行っている。本校児童が「表現する力」に優れているのは、外国語を通じてコミュニケーションを図ろうとする態度を育成しているからであり、次のような視点を大切にした指導を展開している。

- ① 身近な題材を扱い、児童の興味関心を高める教材・教具の工夫をする。
- ② 低学年から外国人指導助手（ALT）にかかわる機会を設定する。
- ③ 外国文化に触れる、慣れる、親しむ活動を通してコミュニケーション力の素地を養うとともに、自分の考えや思いを伝えようとする意欲を育てる。

【総合的な学習の時間】

今回の調査から、授業で学ぶことが「楽しい、もっとやりたい」と感じている児童は、「自分で予想し、確かめることができるから」「自分でやり方を考えて、進めることができるから」「実際に体験できるから」「自分で調べたり、考えたりできるから」という理由を挙げている。このことから、体験的な活動及び問題解決的な学習のより一層の充実が求められると言える。児童が仮説（予想・理由）を立て、観察や実験、調査・取材活動、説明・発表等をとおして検証や追求ができる活動を確保することが大切であり、「総合的な学習の時間」の指導改善のポイントとしては、

- ① 問題解決型の学習を中心とし、調査や取材活動を通して課題の追求をする。
- ② 必要に応じて、まとめたことを発表する機会を設ける。その際には他学年とも交流できるようにする。

（２）教育課程編成上の工夫

授業における指導内容や指導方法の充実・改善以外にも、本校では教育課程編成において次のような工夫を行い、児童の確かな学力の向上を目指している。

【朝学習の実施】

- ・国語（漢字、音読等）、算数（計算、作図等）、読書 週 3 回（各 20 分間）実施

【読書週間の設置】

- ・1 学期、2 学期の 2 回 各 2 週間実施

【授業時数の確保】

- ・A 時程、B 時程、C 時程の実施 余剰時間年間 4 3 時間以上

【夏季休業中の算数教室の実施】

- ・3 年生～6 年生の希望者 5 日間実施

（３）各教科等における言語活動の充実

言語活動の充実は、学習指導要領の改訂の主な改善事項の第一に挙げられており、それだけ重要かつ喫緊の課題である。学校においては、国語科だけでなく各教科等において言語活動を取り入れた授業を行うことが大切である。各教科等において、言語活動を取り入れることが、児童に付けたい力である「思考力・判断力・表現力」の育成につながることを認識し、言語活動を授業の中で有機的に結びつける取り組みにつなげたい。具体的には、各教科等で『説明・インタビュー・話し合い・プレゼンテーション』等を取り入れた授業を展開したい。